

姚灯镇 主编

日本

语言文化
研究

解放军外语音像出版社

PLA Foreign Languages Audio-Video Press

日本语言文化研究/《日本语言文化研究》/ 姚灯镇 主编

洛阳: 解放军外语音像出版社, 2005.6

ISBN 7-89996-354-0/H · 017

I. 日... II. 姚... III. 教材

书 名: 日本语言文化研究

责任编辑: 刘立亮

封面设计: 陈 琳

责任校对: 何建军

出版发行: 解放军外语音像出版社

社 址: 河南省洛阳市涧西区广文路2号

邮 编: 471003

电 话: 0379-4543559

E-mail : PLAFLAV @ 163.com

印 刷: 解放军外国语学院印刷厂

开 本: 850×1168 1/32

字 数: 350千字

印 张: 13.125

印 数: 1-1000

版 次: 2005年6月第1版

印 次: 2005年6月第1次印刷

ISBN 7-89996-354-0/H · 017

定 价: 36.00元

前 言

洛阳外国语学院于2004年5月20日至5月23日举办了“第二届日本语言与文化学术研讨会”。出席这次学术研讨会的正式代表45名,其中35名学者在研讨会上宣读了论文,并进行了热烈而深入的讨论和交流。论文内容涉及日本语言与文化、日本语言、日本社会文化、日语教学等诸多领域。这部《日本语言文化研究》中所收录的论文主要是这次研讨会上宣读的论文,也有少量为部分学者的投稿。

本论文集共收录论文38篇,其中关于日本语言与文化的论文15篇,关于日本语言的论文12篇,关于日本社会文化的论文7篇。这些论文中,有不少是学者们对各自研究领域前沿性课题潜心研究的最新成果,也有一些是洛阳外国语学院的硕士研究生在学习研究过程中的阶段性成果。通过本论文集,我们不仅可以了解到各相关研究领域的前沿信息,而且也可以从学者们独特的研究视角中获得有益的启迪。我们热切地期待着本论文集能够引起学界同仁们的关注!

本论文集的出版得到洛阳外国语学院科研部的大力支持和帮助,在此表示衷心的感谢。

编 者

2005年1月30日

目 录

文化による文法への影響·····	胡振平	1
跨文化交际中的日语副语言表现·····	王秀文	12
中日配慮表現に見られる相違点をめぐって·····	姚灯镇	21
日本語試験をめぐって·····	侯仁锋	35
跨文化交际中文化代码系统的理论初探·····	张 焜	48
试论词汇中的文化代码渗透——以比喻名词为例·····	徐 莲	55
日本語言語文化学的位置づけについての一考·····	费建华	70
中日身体語彙慣用句の意味比較·····	吴 宏	80
隐喻的普遍性和跨文化差异		
——以汉语中与“头”有关的隐喻用法的比较为中心		
·····	刘芳亮	92
中日颜色词的跨文化语义对比		
——人类共同认知心理模式和文化特殊性的融合·····	梁宝卫	110
歌ことばに見られる日本文化·····	臧运发	118
现代社会生活中日本女性语的特色及交际作用·····	秦 颖	126
ボーダーレスな日本人と日本語·····	宫 伟	136
日本人の言語における「甘え」の心理·····	李晓燕	143
「すみません」の文化言語学的考察·····	高 嵩	152
礼貌的跨文化语用浅析·····	李 倩	161
“日语会话原则”研究·····	罗传伟	170
時枝文法における「主体」の意味についての覚書·····	许宗华	186
認知言語学の視点から見た空間と時間の関係·····	李远喜	192
「だろう」の確認用法について·····	张 兴 李 森	199

ダロウ研究への認知的アプローチについて…………… 赵银华 218
省略はなぜ必要であるか

——省略文の語用的職能について…………… 朱立霞 229
「断り行為」における肯定的表現…………… 杨久成 243
現代日本語のかかり語順の研究について

…………… 盛文忠 马燕菁 254
「と」条件文をめぐる…………… 马兰英 266
「動詞句+感覚名詞」の連体節の研究と問題点…………… 傅 冰 274
试论日语混种语动词的构造…………… 马燕菁 287
中日同形语的文体差——以“人的动作”为中心…………… 王 磊 295
日语复合动词的构词特点…………… 张文静 309

近代日本政体模式的探索与确立

——以岩仓使节团对西方政治制度的考察为中心…………… 肖传国 318
吉野作造民主思想的基础溯源…………… 王超伟 330
福泽谕吉的文明史观…………… 屈亚娟 340
黄遵宪和近代中日文化交流…………… 包 央 349
浅论中国古代诗学中的“禅”风对日本审美思想的影响
…………… 史 军 360
关于日本战争文学研究的思考…………… 何建军 369
仕事と子育ての両立に関する施策とそれを妨害する要因
…………… 张卫娣 383

日本語教師の成長におけるアクション・リサーチ

…………… 张文丽 394
「ビジネス日本語」の授業における日本文化の教育
…………… 魏晓艳 406

文化による文法への影響

洛阳外国語学院 胡振平

言語は文化が蓄積して成熟したものである。言語になる各部分も（発音、語彙、文法のいずれも）文化の発達したものである。文法は、人類の抽象的思惟と積極的完備を現すものである。異なる言語は、その使用者の生活環境と労働経験の格差によって出来たものであり、その格差は文化の格差である。

1. 文化の影響

1. 1 文化によって文法の類型（パタン）が違う

言語は普通次のように、三種類に分けられている。

イ、屈折語（例えば英語）文構造は SVO 型

ロ、孤立語（例えば中国語）文構造は SVO 型

ハ、膠着語（例えば日本語）文構造は SOV 型

イ、ロは同じく SVO 型であるが、西洋文化、東洋文化の相違で、違う語系に属し、文法も違うものである。ロ、ハは文構造だけ違うが、同じ東洋文化であるから相通じているところも多い。

1. 2 文化によって思惟方式が違う

思惟と言語の関係についていろいろの論説があるが、まとめて言うと、次の三通りあるようである。

イ、思惟と言語は同一のものだという説

アメリカの行動主義心理学者 J.B.Watson は、次のように考えている。

「思惟は無声の言語であり、思想は自分に対して話したものである。」と。

その後の新行動主義者の B.F.Skinner はまた次のように言う。

「思想はただ一種の行動に過ぎない。語彙的か非語彙的であり、隠蔽的か公開的なものである。」と

ロ. 思惟によって言語が決められる説

2500 年前アリスドローディーは次のように言った。

「言語は思惟範疇諸経験の現れである。」と。

つまり、言語範疇は思惟範疇によって決められるのである。

スイスの心理学者 J.Piaget は言う。

「……論理的思惟は言語より早いものであるだけでなく、言語よりも深刻なものであるから、思惟は言語にとって決定的な役割を果たしている。」と。

ハ. 思惟は言語によって決められる説

西洋のサーピル、ロシアの心理学者などはこの説を主張する。

「労働及び同時に出来た言語は思惟と意識発生の最も主なる推進力であり、各種行動と言語は個体的思惟の基礎である。」と。

ソシュールも「言語と思惟の関係は紙一枚の裏表のようである。」と言う。

いったい思惟と言語の関係をどう扱うか。次の見方が参考になると思う。

まずは、思惟と言語がそれぞれ違う範疇のものだと気付かなければならない。つまり、思惟は過程であり、行動である。だから思惟は内容ではない。言語は思惟の材料であり、形式であるだけでなく、形式と内容の統一体なのである。

それからは、思惟と言語は密接な関係にあるのである。思惟は過程でありながらも言語によって表現するものである。思惟と言語は発生から発展まで、絡み合っていて分けられない関係

にあるのである。言語の精密化、完備化の過程は思惟の精密化、完備化でもある。

思惟と言語は上述の関係にあるものであるから、思惟特徴をはっきりさせれば、言語の特徴も分かるはずである。

1. 3 文化によって文法特徴が決められる。

通説で言うと、世界の文化は三種類に分けられる。

①古代ギリシア文化：人間と自然の関係を重視する。

②古代インド文化：人間と神様の関係を重視する。

③古代中国文化：人間と人間の関係を重視する。

古代ギリシアは落ちつかない海洋環境に生活し、気候も荒く、暮らし難くていつも自然と闘わなければならない。遠距離のたより伝送で音声によるしかない。それで思惟の特徴としては抽象原則を重視し、つまり論理—数学を基礎とする原則である。

従って、その文法特徴は次のようにまとめられる。

①内包豊かな文法カテゴリーで、一定の文法意義を概括し、この文法意義を形式の固定化によって、一定の文法手段を形成する。

②文法手段の目的としては、客観的実状の表現を確実化するのであって、ある言語のように表現の詳細化、形象化を追求するのではない。(詳細化、形象化し過ぎた表現は却って要を掴めなくなるのであるから)。

③文法的意義は裸で豊富な形態変化によって現され、語順やコンテキストによって現されるのではない。

④従って、文法規則としては外在の形式が著しく、習得し易いし、活用に対する要求も厳しくて(例えば、性、数、格の一致性、人称、テンスなど)、一種の法的精神の現れである。

ところで、中国語の文法特徴は次のようである。

①形態変化が足りない。一定の文法意義を現す外的形式がな

い。例えば、実詞は概念（素材）表示は目立っているが、品詞性を表す形式がない。

②融通性。語法も文法も融通性に富んでいる。場合によってこうでもあり、そうでもある。虚でも可であり、実でも可である。文法的には語順で意味を決めると言うが、揺れがある。省略が多いことも融通性の表現である。

③整合性。語法も文法も整合性を重視し、形式を重視する分析性が足りない。語法的には合成語が多くて派生語が少ない。合成語と言っても意味の相加ではないのである。文法的には、実詞だけで虚詞がなくても、意味が受け取られる。例えば、「今天星期四」（今日は木曜日です）。

以上の特徴によって、中国語は簡潔性が特色であり、その反面、把握し難いので、外国人が習得することは難しいのである。

西洋に対して、古代中国は、大自然の環境に恵まれて、それほどほどの圧迫感や緊張感、恐怖感がなかったのである。大自然と密接な関係にあり、近距離で通じ合える。空間に現れる世界を把握し易い。

中国人の思惟の特徴は“天人合一”の具象性原則を重視し、全体の整合性を重視すると言われている。

ソシュールの説によると、言語は純粹の符号（symbol）系統であるが、ある程度の臨摩性（icon）を持っている。すべての符号表現、特に文の長さは何かの組み合わせや順序などの原則によって形成されるのである。これらの原則は、表現における各種の成分に影響をしている。概念原則によって出来た表現は論理—数学原則によって出来た表現より臨摩性が強い。何故なら、前者においては成分の並び及びその順序は割合に実世界の様子を密着に反映することに対して、後者においては、その反対である。

中国語は臨摩性を原則とする言語で、単語や成分などの各部分は、臨摩によって並び、抽象的文法や変形などはいらない。英語の反対である。

日本語はどうであるか。雑種文化と言われているが、積極的な面から言うと、日本は外来文化を吸収する点において昔からもう先進国であったと私は思う。

歴史から考えると、三回の外来文化を吸収する運動があった。一回目は中国の唐時代に学ぶ運動であり、二回目は明治維新で、ヨーロッパに学ぶ運動であり、三回目は、第二次大戦後、アメリカに学ぶ運動である。いつも周りの圧力を感じ、それに学び、吸収するのである。それだけに雑種文化と言われながらも、先進国になったわけである。

言語もそうであると思う。中国と一衣帯水の関係にあるので、もともと文字のなかった日本語であったが、中国から漢字を借りて来て、標音文字として使ったが最後、仮名を造った。

中国語はSVO型と一概には言えないようである。つまり、考古学から見ると、古代中南半島及び全アジア太平洋地域文化は、中国南方の百越民族などと密接な関係にあるようである。最近の漢語チベット語国際会議において、フランスの学者 Sagart は「漢語と南島語は同源である」という論文を発表した。大きなショックであるが、中国少数民族のドウ族語、ソウ（壮）族語だけでなく、漢語も、南島語と同源であると。

マディソフはこう言う。「言語の変化は周期的に行われる。始めにある語順であったが、それから別の語順に変わり、また元の語順に戻る可能性もある。総合型は分析型に変わり、また元の型に戻り、……。チベット・ビルマ語の語順は、普通、主-客-動であり、動詞は末尾にある。漢語には客語が動詞の後にあり、その語順はタイ語、ミョウ（苗）族語に通じる。語順は

変わるものである。中国南方のドウ、ソウ（壮）族語の語順は SVO 型である。それに対して、北方の青海地方の漢語はアルタイ語、チベット語の影響で、語順は SOV 型になり、「我书读」（私は本を読む）、「你字写」（あなたは字を書く）のような型が出来、北方のモンゴル語古語の「我书读」（私は本を読む）、ド（土）族の「茶喝」（お茶を飲む）と文の構造が同じようになったのである。

以上からも分るように、一口に漢語を言っても、昔と現在、南方と北方、語順は全部 SVO 型とは言えないだろう。日本語と同じような SOV 型もちゃんと存在したのである。ウエグル族語は膠着語であるという言い方もある

その外に、古代語の「时不我待」（時私を待たず）の語順も SOV 型で、「物以类聚」（物、類を以って集まる）なども SOV 型である。それだけでなく、現代中国語の「把」字文もその語順は SOV 型といいようである。

2. 日本文化による日本語文法への影響

日本文化による日本語文法への影響と言っても、範囲が大き過ぎる。ここでいうのは勿論文化言語学なのである。

2. 1 対人関係と人称

英語の I、YOU、HE、中国語の我、你、他に当たる日本語は、そう簡単ではない。一人称だけでも、私、わたくし（ども）、僕、俺、わし、我、吾、こちら、小生などがあげられる。これはどういう訳だろうか。

弥生文化時代（紀元前 3 世紀 - 3 世紀）に、中国大陆から稲作文化を導入して、家族、村落、国などが出来た。血縁関係、地縁関係などによって、多くの人と一緒に労働し、生活する。卑弥呼女王の倭国において、卑弥呼は王であり、次に、大人、生口、などの階級が形成した。身分が峻別して、男は刺青の模

様で社会地位を現わしている。自分の位置づけによって、人稱をきめるのは当たり前のことになる。

5世紀前後、王仁が中国の“論語”、“千字文”を日本に伝え、7世紀に聖徳太子が儒学の忠孝理念を基本精神として“憲法17条”を作り、8世紀以後、儒学の“尚書”、“周礼”、“論語”、及び“孝経”などが朝廷の必須科目になったそうである。儒学思想の男尊女卑、忠孝観念が昔からもう日本古代文化に摂取されたのである。人稱には、男女の差や、尊卑の別が強く現れたのである。

2.2 対人関係と待遇表現（敬語）

対話するとき、話し手（自分）と聞き手（相手）が対人関係になる。スムーズにコミュニケーションをするために、待遇表現が必要になるのである。

紀元5世紀前後、儒学が中国から日本に伝わっていった。中国大陆において、儒学は春秋の時代からその核心になる尊卑思想が注目されるようになったのである。儒学は一種の思想としてだけでなく、だんだん思惟方式や行動様式など文化の各方面に浸透してしまった。このような影響も日本にまで伝わったのである。儒学の人倫尊卑観念、君臣倫理などが大和朝廷に理解され、聖徳太子など皇室の基礎的文化教養になったのである。聖徳太子摂政30年間、まったく儒教によって、君臣倫理を強調し、尊卑秩序を提唱し、中国大陆文化を利用して日本列島の直面した王朝統一の問題を解決しようとした。聖徳太子の取った最も有力な措置は、“憲法17条”であった。その核心になる内容は儒学であった。例えば、その第3条には、

“承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、万氣得通、地欲覆天、則致壞耳。是以君言臣承、上行下靡、故承詔必謹、不愆必敗。”

また、その第4条には、

“群卿百寮、以礼為本、...、是以群臣有礼、位次不乱、百姓有礼、国家自治。”と規定している。

儒学の倫理道德は、日本の伝統文化の形成に深く影響したのである。つまり、対人関係には、君臣、父子、夫妻など尊卑の名分がある。

一方、大陸唐風文化の影響を受けたのは、上層の貴族の極少数の人にすぎない。それは日本古代文化の外殻である。日本古代文化を本当に発展させた核心は、やはり地方氏族文化であった。人間関係を決めるのは地縁関係であり、血縁関係であった。

こうして、コミュニケーションにおいては、社会的には、上下、尊卑を、地域的には、親疎、遠近を、集团的には、内か外かを、つまり、いろいろと、自分の地位よりも、まず話し相手の地位を考えなければならない。それによって、言葉の尊敬語か謙譲語かなどの待遇表現を決めるわけである。

2. 3 自然観と自動表現

山川草木の総称として、“自然”が用いられるようになったのは明治中期以後のことである。それまでは、天地万物、森羅万象などの言葉が用いられていた。“自然”とは“おのずからなる”の“おのずから”を意味した。山川草木としての自然も、日本人には“おのずから”な“ものとして捉えられたのであった。”おのずからな“八百万の神神とはそのまま併存する。それは人間にとっては、“やむを得ない”存在であり、どうにも“仕方がない”存在である。生成も消滅も“おのずから”なるものである以上、そのまま受け入れる以外に、“仕方がない”ことになる。

ユダヤ教やキリスト教では、“自然”は神が創造したものであり、人間は、神から特別に委託されて、この自然を管理し、か

つ利用する立場にあると考えられている。日本人は、“自然”を神によって造られたものとは考えていない。また、人間が神から任命された“自然の管理人”である考え方もない。人間も、山川草木も、みな“おのずからなったもの”であり、神なら、同じく神であり、“八百万の神神”になるわけである。

風が吹く。

雨が降る。

雷が鳴る。

地震が起こる。

.....

自然現象はすべて“おのずからなったもの”である。

お茶が入った。

ご飯が出来た。

小包が届いた。

電話が掛かってきた。

.....

人間の行為であるにもかかわらず、“おのずからなったもの”のように考えるのは、一般的なのである。

来週シンポジウムを行うことになった。

来月最終審査の段取りに入った。

事は締めくくりの運びになった。

.....

人間の決めたことではあるが、時間の流にしたがって、“おのずからなったもの”のように述べる。

山が見える。

声が聞こえる。

これは、“おのずからなるもの”の典型的な日本語の表現である。これを中国語に翻訳すると、“看得见”“听得到”のような

可能表現になり、“自動”と“可能”が繋がっている。

当たる、受かる、教わる、係る、切れる……

以上の動詞からも分かるように、“自動”と“可能”が繋がっているのである。“可能”も一種の自動表現と言えよう。

自然にそう思うようになる場合、

そう思われる。(考えられる、感じられる……)

などのような表現は、自発表現というが、つまり、主観的にそう思うわけじゃなくて、“おのずからそうなる”のであるから、自発なのである。そこで、自発も、一種の自動表現である。

先生が見える (お見えになる)。

この文の意味は、まずは“おのずからなる”意味の自動表現であり、可能と繋がっている。つまり、主観的、わざと何をするというふうに受け取らず、“おのずからなるもの”のほうがありがたく思うから、尊敬表現になるのである。

先生が来られる。

先生が行かれる。

も同じく、自動、可能など“おのずからなるもの”のような考えから、尊敬表現になるのである。そこで、尊敬も一種の自動表現である。

“(ら)れる”の意味用法のもう一つは、受け身表現である。

ご飯を食べる

ご飯が食べられる

帽子を被る

帽子が被られる

名を知る

名が知られる

このように、客体(客語)が主体(主語)に交替するのは、受け身表現の特徴の一つである。主体として、どうなるということは、つまり、“おのずからなる”ことである。そこで、受け身表現も一種の自動表現になるのである。

要するに、日本語の自動表現が多いのは、日本人の自然観と

関係がないわけではないと言えよう。

参考文献：

- [1]張公瑾 1998 《文化语言学发凡》 云南大学出版社
- [2]申小龙 2000 《语言与文化的现代思考》 河南人民出版社
- [3]魏常海 1987 《日本文化概论》 中国文化书院
- [4]邢福义 2000 《文化语言学》 湖北教育出版社
- [5]邓炎昌 1994 《语言与文化》 外语教学与研究出版社
- [6]索振羽 2000 《语用学教程》 北京大学出版社
- [7]陈原 1983 《社会语言学》 学林出版社
- [8]刘坚 1998 《人与文》 北京语言文化大学出版社
- [9]邵敬敏 1995 《文化语言学中国潮》 语文出版社
- [10]简·爱切生 1997 《语言的变化—进步还是退化》 译文出版社
- [11]张宗利, 宗文举 2002 《中西文化概论》 天津大学出版社
- [12]米歇尔·德·塞尔托 2002 《多元文化素养》 天津人民出版社
- [13]张立文 2001 《文化圆桌》 广东人民出版社
- [14]高增杰 2001 《东亚文明撞击》 广西教育出版社
- [15]司马云杰 2001 《文化社会学》 中国社会科学出版社

跨文化交际中的日语副语言表现

大连民族学院 王秀文

1. 非语言交际与副语言

语言包括有声语言(口语)和文字语言(书面语),是由语音、文字、词汇和语法构成的音字义结合的符号系统,是人与人之间传达信息、表达思想的重要工具。但是,作为社会交际手段,语言却不是唯一的,还有另一类非常重要的手段,那就是非语言交际。

非语言交际指一切不使用语言进行的,具有潜在信息价值或意义的交际行为。它包括的范围十分广泛,例如体态语、副语言、时空因素、环境因素乃至音乐、绘画、舞蹈等等可以用作交流信息、传递思想、表达感情和态度的诸多因素。本文拟就日语副语言及其日语交际问题作一粗浅探讨。

副语言(Paralanguage)通常被认为是发声而没有固定语义的“语言”,也称为“类语言”或“辅助语言”。有声是相对于无声而言的,例如体态语就是无声的。没有固定语义是相对于常规语言的固定语义而言的,例如日本人常说的“そうですね”,就具有常规语言之外的语义。副语言还包括说话中发出声音的音质、音高、音幅、音调及语速等,以其多变的轻重缓急、抑扬顿挫、高低强弱等表达说话人的思想感情及态度等。也包括词语间所用的填充音(哦、嗯、啊等)、叹息、呻吟、干咳、假噪音等,甚至还包括声音的缺失状态——沉默现象。沉默和话语停顿也属于副语言的领域。

副语言既然称为语言,说明它们也是象语言那样有一定规律